



私は多忙なお助けマン



塚原 朋一
会長・弁護士

《弁護士になって4年目に入った》

弁護士になってはやくも4年目、創英に仲間入りをしてからでも2年目を迎えた。日々のライフスタイルは、裁判官時代と、いろんな意味で、大きく変わった。しかし、法律家としての基本的な仕事は、実は、それほど変わっていない。裁判官時代の仕事は、それまでの状況を迅速正確に理解して決断し、自ら設定した時点で、自らの結論を出すことだった。

今は、それまでの状況を当事者の立場から制限時間内に一応の理解をして判断し、相手方と裁判官の動向を推測することだ。それを踏まえて、どう対応措置を講ずるか、あるいは、防御・抗争するかどうか、何よりも、まずはできる限り正確な推測が肝要だ。そのためには、前提として関連する法律知識が欠かせない。白状すると、実は、ほとんど泥縄式であり、これも裁判官時代とあまり変わらない。

《わが人生、一貫して多忙になり続けてきた》

裁判官時代と大きく変わったのは、やはり、不規則で急な新しい仕事のインプットである。わが人生を振り返ってみると、常に、一貫して、より多忙になり続けてきたのに気づく。思えば、中学3年のとき、人生、はじめての受験勉強が始まった。姉・兄たちが隣の部屋でテレビを見ているのに、自分は机に向かっていて。力道山の

プロレス中継で、歓声が聞こえると、襖を開けて、「どうなったの」と聞くと、「こらっ、勉強しろ」と怒鳴られた。高校入試に合格すれば、自由に遊べると思い、勉強に励んだ。合格して高校に入ると、その日から、大学入試の問題を出され、「えーっ、今度は大学入試か」とがっかりした。

こうしたことが、その後、大学入試でも、司法試験の受験でも、続いた。一年余りの受験勉強で合格してしまったため、その付けを修習時代の猛勉強で払った。裁判官になってからも、多忙化は続いた。裁判官生活の最後は、知財ブームの最中に知財高裁に迷い込み、毎晩のように、毎週末のように、膨大な数の判決と部厚い記録と格闘した。

《退官したらゆっくりとしたい》

退官したら、「ゆっくり休めるのだから」と自分に言い聞かせ、退官後に鑑賞できるように、視聴したいテレビ番組は次から次へと予定録画し、蔵書やファイルと一緒に、横積みにし、退官の日を待った。

2010年8月19日に20件もの判決を言い渡し、誕生日の前日20日に退官。凄まじく多忙な退官劇だったが、すぐに、早稲田のロースクールの授業が始まった。何も準備していなかった。更なる多忙が始まった。同時に、TMIの顧問になったほか、創英などの顧問にもなった。多忙度は、現役時代に比

して、一気に1.5倍程度になった。しかも、仕事は、どれもこれも、目新しく難しい。しかし、私を励起し、躍動させたのは、その難しさとおもしろさだった。

《なんでも相談に応じる無責任法曹として》

昨年4月からは、早稲田の専任教授を退任して、ほぼフルタイムで創英に入った。少しは余裕を作りたいと思ってのトラバークだったが、わが人生の多忙化傾向は、変わらなかった。ほとんど予告もなく、いろんな仕事が事務所内外から飛びこんでくる。退官した直後から続いていることだが、電話での相談や依頼が多い。最も典型的な私の仕事は、「訴訟が心証開示段階となり、裁判官から、こう言われた」、「どういう意味か、これからどうすればいいのか」などという相談だ。ほとんどが弁護士や、弁理士などからだが、長年の旧友もいれば、ほんのわずかに接触した程度の知己もいる。講演を聞いた方や、パーティで歓談した方などもあり、名前も顔もうっすらとしか思い出せないことも少なくない。

《日々、多忙を楽しむことがわが人生》

いわゆる弁護士として報酬のとれる案件もあるが、そうでもない案件で、アドバイスだけで終わるような相談が大半だ。私は、金も受けには、天性、向かないよう

だ。カミさんからは「嫌だったから、断ればいいのに」と言われるが、実は、自分がどんなに忙しくても、どんなに急ぐ別件があっても、どんな相談なのか、聞き耳を立てる瞬間が一番楽しい。最も嬉しいのは、自分が裁判官人生のどこかでかじったことのある案件に出合うことだ。これに、最近では弁護士になって泥縄式で勉強したばかりの法律問題も多くなった。わが書齋には、背表紙に案件名(ニックネーム)が書かれたファイルの山がさらに増えた。この数年、さすがに知財法関係が多いが、今でも、会社法、倒産法、独禁法などの相談があると、「あつたはずだ」と古いファイルを捜す。新しく読んだ文献は、コピーしてこれに閉じこむ。その数の多さに、自分の人生の長さ、自分だけが味わう豊かさを感じる。

《ポンコツ人生を迎えるまでは現役のまま》

しかし、この多忙化は、いつか、急にスローダウンする。多分、体力の限界が私を襲うだろう。私は、快くその日を受け入れたいと思う。しかし、それまでは、自分を頼りにして相談に来る人がいる限り、何をさておいても、まずは、話を聞きたい。そうして、また、新しい世界に入り、新しい本をネットで購入し、懸命に、わが得意の泥縄式の勉強をし、そして、苦闘の末、結果を迎える。最後には、「ありがとうご

ざいます」とお礼を言ってもらい、人間関係も終わりになる。その後の経緯や結果を知りたいこともある。しかし、こちらから、「あの件はどうなったのか」とは聞かない。

多忙化を歩んできた私には、いわゆる趣味は、徐々になくなっていった。語学の勉強も、ほとんどできなくなった。あれほど楽しかったドイツ語の勉強も、めったにしなくなった。今や、私の喜びは、相談や依頼に来た方から「ありがとうございました」と言ってもらうことに尽きる。

《双樹に集う小さな友人たちとの語り合い日々はいつ》

趣味の話ではないが、人生の大半を過ごすわが書齋の前に、ハナミズキの双樹がある。餌となりそうなものを工夫して、その小枝に取り付け、やって来る小鳥たちからの求めに応じる。メジロ、シジュウカラ、ヒヨドリ、ツグミ、キジバト、ムクドリなどがやってくる。ペアが多いが、事情がありそうなシングルもいる。個体識別はとてできないが、どうも、鳥同士のいさかきも多そうだ。いつの日か、そう遠くない日に、人間同士のいさかきの仲裁を卒業して、彼らの相談に、ひもすがら、ゆったりと、応じる。そんな日々が待ち遠しくもあり、待ち遠しくもない。

以上